



病理検査には細胞診と組織診があり、その検体採取方法は様々です。その中で今回は、針を使って検体採取するせんしきゅういんさいぼうしん穿刺吸引細胞診とはりせいけん針生検（組織診）についてお話をさせていただきます。

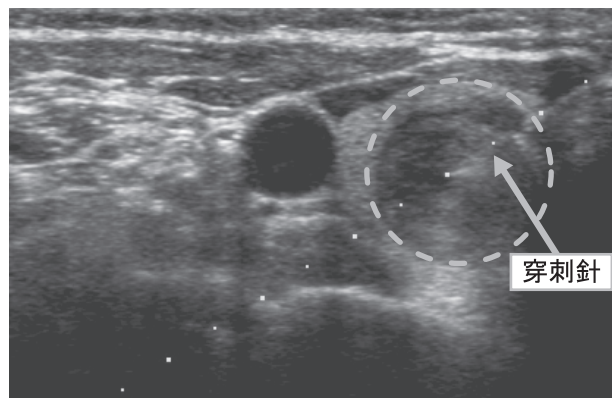
【穿刺吸引細胞診】

“穿刺吸引細胞診”とは、病気が疑われる臓器に皮膚表面から針を刺し、病変の細胞を吸引採取し、顕微鏡で観察し、良性悪性の判定や病変の推定（腫瘍なのか炎症なのかなど）を行う検査です。

この検査は体の表面に近い臓器や病変を対象として行われ、当院では主に乳腺、甲状腺、リンパ節などに行われています。

また、エコー観察下に行われることが多く、病変部をリアルタイムに観察しながら、正確に病変部に針を進め、細胞を採取することができます。

ただし、身体への負担の少ない細い針を使用するため、判定に必要な細胞量が採取できない場合もあることをご理解いただきたいと思います。



■ 穿刺吸引時の甲状腺エコー

点線で囲った病変に対し右上から斜め左下に向かって針が刺さっている様子

【針生検（組織診）】

穿刺吸引細胞診と同様に、針を使って検体を採取する検査に“針生検（組織診）”があります。甲状腺ではあまり行われませんが、乳腺、リンパ節、肝臓では日常的に行われています。

【穿刺吸引細胞診と針生検の違い】

二つの検査の一番大きな違いは採取する検体の大きさです。針生検では穿刺吸引細胞診に比べて太い針で検体を採取するため、組織の構造が把握でき、読み取れる情報量が多く、より高い診断能力があります。しかし、大きく採取する分、身体への負担がやや大きく、通常、先に穿刺吸引細胞診を行い、悪性が疑われる場合や、細胞診では判定が困難な場合に、追って針生検を行うことが多いです。

二つの検査の違いをまとめると右の表の通りです。

みなさまに検査内容を理解して頂き、安心して検査を受けて頂ける様、情報を発信していくとともに、治療に役立つ検査データの提供に努めてまいります。

	穿刺吸引細胞診	針生検（組織診）
身体への負担	<u>小さい</u>	大きい
情報量	少ない	<u>多い</u>
結果が出るまでの期間	<u>早い</u>	遅い (標本作製に時間がかかる)
保存検体での追加検査	不可能 (保存なし)	<u>可能</u>